別紙１－１

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　土屋 陽子

論 文 題 目　Urban Pastoralism in Theodore Dreiser's Works

論文審査担当者

主　査	名古屋大学教授	長畑　明利
委　員	名古屋大学教授	村主　幸一
委　員	名古屋大学准教授	Mark Weeks
委　員	ノートルダム清心女子大学教授	David Ramsey

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

１．本論文の構成と概要

本論文“Urban Pastoralism in Theodore Dreiser's Works”（「セオドア・ドライサー作品における都市的パストラリズム」）は、20 世紀前半に活躍したアメリカの自然主義作家セオドア・ドライサーの長編小説に示される「都市」と「牧歌」の関係と、その関係に対する作者の態度の変化を明らかにすることで、ドライサー作品の再評価を試みるものである。

ドライサーは、その著作を通じ、シカゴやニューヨークといったアメリカの大都市を舞台に、人々の生活と社会の現状をありのままに描いた作家である。彼はその生涯に「欲望 3 部作」を含む 8 編の長編小説を執筆するが、そのほとんどが、19 世紀後半もしくは 20 世紀初頭の都市社会を舞台とすることにより、都市社会の考察を作品の重要な要素としている。従来の研究が多く指摘してきたように、彼の作品には都市社会で生きることに対する希望と失望、理想と現実、成功と脱落が描かれており、それらの間で翻弄される人間の存在の弱さ、個人の意志の無意味さが示されている。それゆえ、従来のドライサー研究の主流は、ドライサーを都市小説家として認識し、その都市描写から明らかになる人間の反道徳性、あるいは個人の弱さを読むことにあった。しかし、ドライサーの主要作品には、このような解釈によっては見逃されがちな「自然」および「牧歌」のモチーフを見て取ることができる。本論文は、「欲望 3 部作」の第３部である *The Stoic* を除く 7 編の長編作品を取りあげ、そこに見出される自然描写ならびに牧歌への関心を指摘するとともに、都市化と自然もしくは牧歌的理想との関係に対する作者の態度を論じるものである。

本論文は全 6 章からなり、これに Introduction（序論）と Conclusion （結論）が加わる。「序論」では、問題設定と用語・概念説明、先行研究とドライサー評価の変遷、各章の構成が示される。

続く第 1 章“*Sister Carrie*: A Shadow of the Country in the City”は、ドライサーの長編第 1 作 *Sister Carrie* を取り上げ、都市小説の代表作として知られる本作品中に「田舎」の影が見られることを明らかにする。学位申請者（以下、「申請者」）によれば、本作品において、都市に対する田舎の存在がドライサーによって排除されているように見えるかもしれないが、主人公キャリーはしばしば田舎の存在と関連づけて描写されている。また、ロッキングチェアに揺られて思慮するキャリーの描写の反復には、都市化が進む社会の中で、「都市的価値」と「牧歌的理想」に挟まれた当時の人々の不安定さを、あるいは、都市化の影響を受けた人々の牧歌的理想への憧れを読み取ることができる。つまり、主人公キャリーは都市生活の申し子のように描かれる一方で、実は、当時の都市住人が抱く牧歌的理想をも喚起する、と申請者は主張する。

第 2 章（“*Jennie Gerhardt*: Escape from the Urban World”）は、ドライサーの長編第 2 作 *Jennie Gerhardt* を取り上げる。申請者は、主人公ジェニーの描写が「牧歌的理想」と「都市化」という二面性を示すことを指摘したうえで、ドライサーによるジェニーの描写には、「都市」と「牧歌」の共存の理想（urban pastoral ideal）に対する作者の肯定的な姿勢が見出せると主張する。

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

申請者によれば、本作品の主人公ジェニーと彼女の愛人レスターの関係は「牧歌」と「都市」の関係を寓意的に示す形で描写されている。その寓意に基づいて作品を解釈すれば、ジェニーが体現する牧歌的自然は都市化されていくことを示すが、同時にその自然は都市社会からの逃避先としても位置づけられている。すなわち、ジェニーは「都市化を許す牧歌」と「理想としての牧歌」の両価的な意味を帯びているのである。ドライサーはそのようなジェニーを最後まで好意的に描いており、そこには、都市的価値と牧歌的理想の共存に対する作者の肯定的な態度を見て取ることができる、と申請者は主張する。

第３章（"*The Financier* and *The Titan*: Changeable Relationship between the Urban and the Pastoral as Evoked through Cowperwood's Affairs with Women"）は、社会的強者を主人公に都市社会を描いた「欲望３部作」の第１部 *The Financier* と第２部 *The Titan* を扱い、そこに描かれた「都市」と「牧歌」の関係を、主人公の女性関係の変遷から読み取ることを試みる。都市実業家を主人公とし、都市の腐敗の実態を示したこれら２作品は、これまでしばしばドライサーの都市批判の作品と考えられてきた。しかし、申請者によれば、本作品においても、登場人物の関係は「都市」と「牧歌」の関係を寓意的に示すものである。すなわち、都市社会を生きる資本家である主人公クーパーウッドは「都市」を体現する存在であり、一方、彼が関係を持つ女性たちは「牧歌」を体現するものとみなしうる。その寓意に基づいて主人公の女性遍歴を見ると、そこには「都市」と「牧歌」の共存に対するドライサーの両義的態度が示されていることが分かる。申請者は、主人公と関係を持つ女性たちの中でも特に重要な役割を担う３人の女性を取り上げ、その描写の変化に示された「都市」と「牧歌」の関係の変化について考察している。

第４章（"*The 'Genius'*: The Unstable Relationship between the Urban and the Pastoral"）は、同じく社会的強者を主人公として都市社会を描く *The "Genius"* を扱う。本作品には、主人公の、「芸術」と「商業」の間の葛藤と、性的問題を巡る「因習的価値」と「都会的価値」の間の葛藤が相互に関連しながら描かれているが、申請者はそこに「都市」と「牧歌」の関係を読み取ろうとする。すなわち、「芸術」は「都市」と同格で示される「商業」に対立するものとして示され、牧歌的イメージを付与された登場人物アンジェラと結びつけられている。作品中、それら（芸術/牧歌/アンジェラ）は、都市社会での成功とは相容れないものとして一旦は排除されるものの、作品の結末において主人公ユージーンのもとに残される。しかし、ドライサーはアンジェラを「牧歌」を示すものとして芸術と結びつけながらも、彼女を都市化と共に現れたニューヨークの新しい芸術様式には適応しえぬものとして描いている。すなわちドライサーは、「欲望３部作」で描いた「都市」と「牧歌」の不安定な共存を、本作品においては「芸術」という文化的側面を媒介させて描き、両者の関係に対する懐疑的な態度を表しているのだ、と申請者は主張する。

第５章（"*An American Tragedy*: The Dissonance of Urban-Pastoral Harmony – Lakes as a

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

Symbol of the Urbanized Nature”）は *An American Tragedy* を扱う。申請者によれば、この小説では、湖という自然空間で起こった実際の事件が資本主義社会のもたらす悲劇のモデルとして利用されているが、そのことは、かつては神聖なものであった自然が世俗の犯罪の舞台となったという事実にドライサーが注目していたことを示している。地方の自然がレジャー産業によって利用され、また、そこが犯罪の場とされることを示す一方、ドライサーは地方社会に依然として残る因習的規則と階層構造をも浮き彫りにしている。つまりドライサーは、自然空間への都市化の浸透と、そこに依然として残る慣習を描くことで、都市化の影響を受ける地方社会の不安定な状況を示し、また、「都市」と「牧歌」の理想的な関係に対する自身の否定的な態度をも示している、と申請者は主張する。

第 6 章（“*The Bulwark*: The Disappearing Pastoral Ideal – ‘The Spirit of the Times’ versus ‘the Spirit of the Barnes Home’”）は、ドライサーがその晩年に執筆した長編作品 *The Bulwark* を扱う。ドライサーの死後に出版された本作品は、しばしば、自然主義作家ドライサーらしからぬ宗教的な作品であると言われてきたが、申請者によれば、本作品もまた資本主義社会を背景とし、「都市」的価値と「牧歌」的理想の対立関係が大きなテーマとなっている。申請者は、その対立関係が、信仰を重んじるソロンと華やかな世界に影響を受ける子供たちとの対立に示されることを明らかにし、牧歌的な理想主義に基づく「バーンズ家の精神」が、都市的な物質主義に基づく「時代の精神」と対立していることを示す。そしてさらに、その対立に介入し、「別の世界への扉」となって時代の精神を子供たちに伝える役割を果たすのが、世紀転換期に出現した「新しい女」の具体例として考えられる二人の叔母であることを指摘する。他の作品ではしばしば「牧歌」を体現するものとして描かれた女性が、本作品では都市化を推進する役割を担っていることに着目すれば、本作品に描かれているのは、絶対的な都市の力であり、都市化によって作られた新しい社会なのだと申請者は主張する。

「結論」は、本論文各章の論点を整理するとともに、ドライサーの作品における「都市」と「牧歌」の関係について、次の 2 点を確認する。第 1 は、都市描写と反因習的見解で知られるドライサーが、実は自然の牧歌的価値も重視し、それゆえ、彼を「田園小説家」とみなすことも可能であること、第 2 は、「都市」と「牧歌」の調和に対するドライサーの態度が変化を遂げ、晩年には、「都市」の影響力を不可避のものとみなすにいたったことである。

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

2. 本論文の評価

本論文の価値は、まず第１に、ドライサーの長編小説７編を取りあげ、それらを「都市」と「牧歌」の観点から論じた点にある。都市小説家として知られるドライサーの作品を「牧歌」の視点から論じた先行研究は少ない。「都市」について論じる際には、必然的に「田舎」についての言及が含まれることも考えられるが、「牧歌」の側に焦点を充てて、ドライサーの長編小説を包括的に論じる本論文の試みには独自性があり、評価できる。

第２に、本論文は、個別作品の分析において、テクスト中の細部に着目し、その細部について興味深い解釈を提示している。例えば、*Sister Carrie* において、キャリーの出身地である Columbia City に言及がなされる箇所を辿り、それらを都市に出たキャリーにつきまとう「田舎の影」とみなす解釈（第１章）、キャリーがロッキングチェアに揺られる複数の場面を追い、そこに「都市」と「田舎」の中間領域を見る解釈（第１章）、*An American Tragedy* において、作品中の湖の描写を Thoreau の *Walden* 中の湖の描写と比較し、両者の類似点と相違点を見出す作業（第５章）など、本論文には、しばしば見逃されがちな、作品の細部に注目した読解の実践例が提示されており、この点も評価できる。

一方、本論文には、次のような弱点も見出される。ドライサーの長編小説のうち「欲望３部作」の第３部である *The Stoic* が論じられていないこと、「牧歌」の概念についての議論が十分に掘り下げられていないこと、女性や宗教が「牧歌」を体現するとする際の説明が不十分である場合があること、「都市」と「牧歌」のそれぞれを登場人物に投影し、その描写に着目する寓意的読解がときに図式的に過ぎることなどである。

これらはいずれも論文の骨子に関わる指摘であるが、それによって論部全体の評価を損なうものではない。むしろ、申請者の今後の研究活動に役立てるべき点として指摘されるものである。本論文は、一般に都市小説家として評価されるドライサーの諸作品を「牧歌」のモチーフに着目して読み解き、その読解によって、「都市」と「牧歌」の調和に対するドライサーの態度の変化を見ようとする意欲的な論文である。審査委員は全員一致して、本論文が課程博士を授与されるに値するものであると判断した。